

INTERVIEW

文 / 神崎典子

山岳医療のDr.が語る“未来医療”のありかた 自然の中にとると気持ちがいいのは、 「植物性意識」と共鳴するからです



松本市安曇にある東大涸沢診療所にて、仲間のスタッフと稲葉先生。「今年の夏は忙しくて、1度しか来られなかったのが残念です」

「大学生になったとき、屋久島で初めて登山を体験しました。そのときに感じた自然のすごさに感動して山岳部に入部。8000mの無酸素登山を成し遂げたことで知られる登山家のライオンホルト・メスナーに憧れていたというのも理由のひとつです。学生ときはほとんど山にいたんじゃないかな(笑)。さんざん登山をしていて、あるとき『いろいろな人が山を支えている』ことに気がついたのです。それで、自分なりに何か貢献したいと思い、大学の山岳診療所へ通うようになりました」

東大医学部の大学院を卒業し、同大学附属病院で心臓カテーテル治療の専門医として活躍する新進気鋭のドクター・稲葉俊郎先生が通っているのは、1960年に開設された北アルプスの涸沢にある東大涸沢診療所(7月下旬〜8月下旬のみオープン)。東大医学部の山岳部の学生やOBの医師が、ボランティアで夏山登山者のケアにあたっている。「どんな理由で、診療所に駆け込んでくる人が多いと思いますか? 実は、火傷なんです。狭いテントの中でお湯を沸かして、そのお湯で火傷をしてしまう人が意外と多い。みなさんも気をつけてくださいね」

山岳医療に携わって約15年。

山では物や設備が乏しいため、医師はさまざまな工夫をして治療にあたらなければならぬ。また、自分の体は自分で守るという基本も山から学んだ。大自然に身を置きながら、医療の本質を考えさせられたという。

「たとえば、呼吸。生きものは呼吸をしてひとつひとつの細胞に酸素を届けているのですが、標高の高い山では酸素分圧が低くなるため、呼吸が苦しくなっています。この苦しさを軽減するためには、自分で呼吸法を工夫するしかありません。私は、横隔膜だけを動かす「密息」という呼吸法を学んでいます。この呼吸法は日本人の体に合っていて、とても効率的に酸素を取り入れることができます。歩き方も同様で、昔の日本人の歩き方「ナンバ歩き」は、右手と右足、左手と左足を同時に前に出す筋肉をねじらない動きなので、疲れにくい。登山など自然の中では、いかに体を疲れさせないかが大切で、そのためにどう体を使うかを考えなければなりません。医学もこの「体の使い方」に注視する時代にきていると思っています」

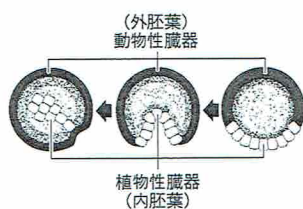
自然からいただいた恵みである酸素、つまりエネルギーを効率よく体の中で使うためには、まずは自身の体のことを知る必要がある。

要がある。

「内なる自然である体をどう考えるかが大切。体は自然と分断されたものではありません。だから、100人いたら100人違っていて、それぞれの対応があるのが当然。それでもうまくいかない場合、プロである医師がサポートする。医療従事者も体に対する知識、知恵が少なくなっていると思います。西洋医学だけでは限界があるので、私は、東洋医学や日本の伝統芸能など、さまざまなフィールドから幅広い視点で、体と心のことを学ぶようにしています。たとえば伝統的な「能」の歩き方や体の動きし方なども、とても参考になります」

私たちの体は60兆個の細胞から構成されていて、常にすべてが調和に向かって働いているという。だから、誰にでも自然治療力は備わっている。

「人間の受精卵は、最初に、植物極」と動物極に分かれて、



受精卵は植物極(植物性臓器になる側)と動物極(動物性臓器になる側)があり、最初の分化の際、植物極が動物極の内側に入る。

東京大学
医学部附属病院
循環器内科助教
稲葉俊郎さん
1979年熊本生まれ。04年東京大学医学部卒業、14年同大学内科学大学院博士課程卒業(医学博士)。心臓カテーテル治療が専門。



それぞれが「植物性臓器」と「動物性臓器」になっていきます。人間の体の内側は「植物性臓器」でできています。これは、「性や食」を担当する命の根源で、自然と調和ができる臓器です。そして、その周りを「動物性臓器」が取り囲んでいます。これは「感覚→神経→運動」を担当し、反自然的な性質を持っています。人間は動物性臓器である脳が大きくなり、植物性臓器の存在を感じにくくなってしまいました。体が内側には、自然と調和が持てる「植物性意識」が備わっているのです」

登山をしたり、森を散策したり、海辺でぼんやりしたり。自然に身を任せると、心身共に気持ちよくなるのは、こんな理由からなのかと気づかされる。

「本来、生命は調和的で、自然そのもの。人が自然の中へ出かけたくなるのは、大自然と人間の内にある「植物性意識」が共鳴するからかもしれませんね」